

山の百花

同人会員 神森 揮子

【89】ヨコヤマリンドウ

まだ慶応大学に在職中のことである。就寝前になると、よく花やキノコの図鑑をながめていた。そんなある日、「山の花図鑑・大雪山」の中にその花をみつけた。日本では大雪山のしかもごく限られた地域にのみ自生すると書いてある。今度の山行ではまさしくその場所を通過する予定であった。

7月初旬の裏大雪は豊富な残雪で美しい。しかし、私の頭からは「ヨコヤマリンドウ」の文字がこびりついて離れない。いよいよ目的地に着いて探してみるが見つからない。とりあえず、予定もあるので、白雲岳の頂上を目指した。花を探しながらの帰り際、あまりきよろきよろするのでぬかるみの斜面に足をとられ、よろけて手を付いた。ふと、その横を見た。なに、このさえない色の花、「えっ、ヨコヤマリンドウ」思わず声をあげた。怪我の功名とはこの事か。

ミヤマリンドウに似ているが色が全然ちがう。一本の花茎に暗紫色の花冠が数個、光沢のあるぼつてりとした厚い葉が対生に

ついている。華やかさはないが全体を見ると、何処となく日本画のような色彩である。それゆえ、周りの景色に溶け込んで目立たない。よほどの花好きでないと見向きもしないかもしれない。しかし、ここで時間を惜しむわけにはいかない。慎重にその一株を写真に収めると、満足感とともににや

らかな底から笑いがこみ上げてくる。それをかみ殺した姿はおよそみられたものではなかったろう。おーい、そろそろ行こうかと言う声に導かれ、先を急いだ。さあ、明日の目標はウズラバハクサンチドリである。



Handwritten signature or mark.



【90】タカネマンテマ

この花に出会ったのは登山を初めて三年目の頃、娘と登った北岳山頂付近である。年配の女性グループの方に教えてもらった。それ以来、北岳には四回訪れたが、いずれもタカネマンテマの時期からは外れていた。

もう一度見たいと言う衝動にかられ、まだ一度も見ることがないという研究生の木村さんと白根三山テント自主山行を思い立った。初日、重いザックを背負い、背後からは夏の強い日差しに襲われながら、やつとの思いで肩の小屋テント場にたどりついた。しかし、次の日この辛抱が報われることになる。テン場を後に頂上へと登るなか、なんとタカネマンテマは初めて見た時と同じ場所ですべて待っていてくれたのである。

俵型に白い肌、濃緑色の縦縞模様、おちよぼ口のような花卉をピンクに染めて、朝の光の中、風に揺れている姿はどこかなまめかしい。そういえば、この花、タカネピランジに似ている。帰ってさっそく調べてみると両者とも確かにタカネマンテマ属の花とある。高山植物は基本的に最大限自分を誇張し、子孫を残そうとすると聞いているが、タカネマンテマは何故この様な控えめな花卉を望んだのであろうか。心の中で彼らに聞いてみた。しかし、花達は相変わらずおちよぼ口をすぼめたままである。「答えなくてもいいから、ずっとこのまま生き延びてね」と囁いてその場を後にした。